

聖家族

2009.12.27

(ルカによる福音 2・41-52)

今日、私たちはこの一年の最後の主日を迎え、この一年私たちが担ってきた、そして一年のこの時期を迎えても依然として担って行かなければならない重荷の全てを、神にお委ねし、とにもかくにも、ここまで歩み続けることが出来たことを感謝し、迎える新たな年への神の祝福を願ってこのミサをおささげしています。そのような私たちの思いの中で迎えるこの一年の最後の主日を、教会は毎年、聖家族の祝日として祝います。聖家族とは私たちが祝ったクリスマスに、私たちの中に来てくださった神の御子の中に入れてくださる家族です。

私たちは一人ひとり、それぞれの重荷を負っていますが、しかし、多くの場合その重荷の大半は、私たちがそれぞれの家族の一員であることによって負われ、負って行かなければならない重荷ではないでしょうか。一年の終わりのこの主日に聖家族の祝日を祝い、聖家族を思う私たちは、私たちの家族の中に主がいてくださることを願わざるをえません。主がともにいてくださる、そのことが本当に信じられれば、家族のために負っている重荷を、私たちの中にもともにいてくださるそのお方に委ね、そのお方とともに私たちのこの重荷を負い通して行く力を見出すことが出来ることでしょう。「疲れた者、重荷を負う者は私のもとに来なさい。休ませてあげよう」と言われるお方は、私たちの家庭生活の只中にもともにいてくださる。私たちの心がそのことに気づくなら、全てをそのお方にお委ねしつつ、どうしても手のつけようもない、その重荷を負ってゆく新たな気力を奮い立たせることが出来ることでしょう。そのような恵みをお互いのために祈りつつ、一年の最後の今日の主日のミサ、聖家族の祝日のミサをともにおささげしたいと思います。

この聖家族の祝日に毎年朗読される聖書の箇所は、普通私たちが家族ということばを聞いて想いかべる家族団らんの情景とは異なった、どこの家庭にもありうる緊張状態を語っています。このエピソードを語る聖書が意図していることは、イエスがそこでお育ちになった家族の歴史を語ることを主眼としているわけではありませんが、今日の福音に語られている出来事はヨセフとマリアとその子イエスによって構成される家族にとっても、決して忘れることの出来ない、イエスの少年期の出来事であったに違いありません。「母はこれらのことを全て心に納めていた」と一連の出来事の結びとして今日の福音は語っていますが、それは、神の御子の母としての聖母の信仰のありようを示す表現であると同時に、世の母親がわが子に対して共通に持つ、マリアの母心を示しているようにも思えます。

「聖家族の祝日」という今日の典礼の枠の中で、今朗読されたルカ福音書の箇所を味わうとするなら、私たちはそこからどのようなことを読み取ることが出来るのでしょうか。一見、私たちの家庭生活とは縁遠いように感じられる今日の福音は、私たちの家族の絆をあらためて考え直すヒントを与えているようにも思えます。

祭りのための巡礼の旅の帰り道、両親はイエスを見失います。過越しの祭りのための巡礼は、ガリラヤの田舎町に住む人々にとっては、一年に一度の晴れがましい大旅行です。親類縁者、町の顔なじみの皆が連れ立って、エルサレムの神殿への参詣に出かけるのです。このために一年間こつこつと働いてきたのです。聖なる祭りの期間の緊張が解けて、祭りの間、都で見聞きしたいろいろなことを楽しく語り合いながら帰路に着いたことでしょうか。両親はてっきり、そんな人々の群れの中のどこかにイエスはおられるとと思っていたことでしょうか。イエスはもう十二歳になっておられ、大人たちから離れて、自分たちの仲間同士で行動しても心配のない年頃です。そんな風にして、両親はイエスを見失います。都に向かう行きの道なら、こういうことは起こらなかつたでしょうか。家路をたどる帰り道の油断があつたかもしれません。分かっているはずだ、どこかにいるはずだ、自分たちの親としての自身が覆される、親子の断絶の事実を知った時の親の驚きと苦悩を聖家族も経験したと言えれば冒涇になるでしょうか。聖家族もまた家族として生きたことによって、家族とは何かを示し、そのことによって全ての家族の模範となっているのです。

ヨセフとマリアは必死になってイエスの行方を捜し歩きます。団体旅行の中で起こった我が家の不祥事です。皆が心配そうにしてはくれますが、そのことが一層、両親の心を追い詰めてゆきます。子供が側にいる時には、ほとんど意識することもなかつた親であることの責任の重さ、親であることの切なさをマリアとヨセフも経験したのです。家族の絆とはこのようなものなのでしょう。

悲しいことに、普段当然のことと受け止めていた、家族としてともに生きることの、ともすれば見過しがちな、与えられている大きな恵みにこのようなことが起こると、今さらながらに気づかされるのです。ヨセフもマリアもそのような事態を経験させられたのです。

三日目になってやっとイエスを探し当てた両親は、そこにいるイエスの姿に仰天したに違いありません。子供だ子供だとばかり思っていたわが子が、いつの間にか自分たちの手の届かないところに立っている。自分たちには近寄りがない、都の大人たちに交じって、堂々と渡り合っているわが子を見出した時の、マリアとヨセフの驚きと、誇りがましい思いと、一抹の淋しさを、親であるなら誰でも経験するに違いありません。

「何故こんなことをしてくれたのです」。母のそのことばに答えてイエスが言

われたことばに。両親は目を剥いたことでしょう。この子は自分たちに理解できないことをしゃべっている。もう自分たちには理解できない世界に生きはじめている。その時になってマリアは、その子を授かる前に天使から告げられていたことを思い出したかもしれません。ベツレヘムの厩でその子が産まれた時のことを、あらためて思い起こしていたかもしれません。そして、自分がそのような子供の母親であったことを、あらためて気づかされたかもしれません。家族の生活とは、そのようなものではないかと思えます。その子を授かった時の感動は、長い、長い家族の生活の中で日常の中に埋もれてしまいます。そのような日常の中で、自分たちに与えられていた、お互いのかげがえのなさを再発見するためには、それがどのように辛いものであっても、このような出来事が必要なのでしょう。こうして、家族の中の新しい関係が生まれてゆくことになるのです。

ナザレに帰ったイエスは、前と何も変わったところがないように、両親とともに生活しています。けれども、聖家族の生活は、あのエルサレムでの出来事があった日以来、平穏な日常の親子の生活の中に静かな緊張関係を生み出したに違いありません。この子はやがて自分たちのもとから、この子が生きる、神が用意しておられる広い世界に旅立って行くのだ。何も変わったところのない、普段の家族の生活の中で、両親の心のうちにはあの日以来、その覚悟がしっかりと刻み込まれたことでしょう。

ベツレヘムの町で、ヨセフとマリアの子として生まれたあの子が、どのように成長して行かれたか、その家庭環境はどのようなものであったか、聖書は今日の出来事を除いて何も語っていません。そのような家族の生活をことさらに、「聖家族の祝日」として祝うためには、私たちに与えられている情報は少なすぎるように思えるかもしれません。けれども、今日の聖書が私たちに示す聖家族の姿は、私たちが生きるそれぞれの家族の絆を、神が与えてくださった恵みであり使命であると、あらためて受け入れてゆくために、十分な示唆を与えていると思います。二度と繰り返すことの出来ない、この一年の家族としてともに生きることの出来た恵みを、聖母がそうされたように、深く、深く心のうちに納めて、この一年の終わりの感謝の祭りをともにおささげたいしましょう。

カトリック高円寺教会

主任司祭 吉池好高